

中高年の心の危機とジェンダー

おかもとめうこ

岡本祐子 ● 広島大学教育学部助教授

一. はじめに

出生後に分化する心理・社会的な性、つまり、後天的に家族や社会的要因によって作り上げられる性であるジェンダーに関する問題は、ライフサイクル全体を通じてのテーマである。しかしながら、ジェンダーに関する問題は、これまでどちらかというところ、より若い世代の関心事であったように思われる。特に「男性は仕事、女性は家庭」という伝統的性別役割観や従来の男性性、女性性のとらえ方は、若い世代においては大きく揺らぎ、そのジェンダー差は次第に小さくなっている。

それに対して、中高年の人々の多くは、伝統的性別役割観を支持し、いわゆる伝統的な男性性、女性性に対する親和性を保持しているため、あまりジェンダーに関する論議が表に出てこないように見受けられる。しかしながら、

人生後半期に遭遇する心の危機には、それを揺るがすような局面が決して少なくない。むしろ中高年期こそ、各人のジェンダーのあり方、つまり自らの男性性・女性性の中身や性別役割観に対してどのようなスタンスをもって来たかが問われる時であろう。それは、個人のあり方としても、重要な他者との関係性の中にもあらわれる。

本稿では、中年期の入り口や現役引退期という人生の節目に、ジェンダーの問題がどのようにあらわれ、それが心の発達にとつてどのような意味をもつのかという問題について考えてみたい。

二. 中年期のアイデンティティ危機とジェンダー

(一) 男らしさと女らしさの統合

今日では三〇代の終わりから四〇代にかけての中年期の入り口は、自分の生き方、あり方が問い直されるアイデン

テイティの危機期であることが、知られるようになった。もうそれほど若くはないという意識、どのくらい年の数、生きられるだろうかという時間的展望のせばまり、仕事の上でどれだけ業績をあげられるだろうかという限界感の認識、老いや死への関心の増大など、中年期の入り口で体験される心の変容は大きい(岡本、一九九七)。

レヴィンソン(一九七八)は、四〇代前半を「人生半ばの移行期」と呼び、この時期には、心の内面に存在する対極的な特質に折り合いをつけつつ、自らの中で統合していくことが求められると述べている。それらの対極的な特質とは、①若さと老い、②男らしさと女らしさ、③破壊と創造、④愛着と分離である。この中に、「男らしさと女らしさ」という特質が含まれていることは、注目に値する。これは、次のようにとらえることができるであろう。

これまでずっと、「誰にも負けない」「泣き言を言わずがんばる」「がむしゃらに走り続ける」といういわゆる「男らしさ」を自らの信念として人生前半期をがんばってきた人は、人生半ばの岐路に立った時、別の資質を獲得することが求められる。それは、他者を慈しむ、より若い世代を育てるといふ、伝統的に「女性らしさ」と呼ばれてきた資質である。男性にとつての女性らしさとは、このような世代性(エリクソン、一九五〇)の課題とケアをどのように実践していくかにかかっている。男性の場合、それは人生前

半期の、社会の中に根付き、力を発揮していく時期には、心の奥に後退してしまっていた女性性の側面への気づきと統合である。

それでは、女性の場合はどうであろうか。これまで子育てに多くのエネルギーと関心を注いできた母親の多くは、中年期に子ども達の自立の試みに遭遇して、母親役割以外の自分の生き方の模索を始める。ポスト子育て期の女性の母親役割の喪失からくるアイデンティティの危機、つまり空の巣症候群からの立ち直りは、社会の中に自分の活動の場を得ることから解決する場合も多い。例えば、職業への復帰や新しい仕事の獲得、ボランティアや地域活動などの社会的活動、学習の場への参加などである。社会的な役割を獲得・遂行していくことは、自立性、実行力、決断力など、いわゆる伝統的に「男らしさ」と呼ばれてきた資質を獲得していくことにほかならない。これは、「はぐくみ・育て」というこれまでの女性性を前面に出した生き方から、男性的な特質を自分の中に獲得することでもある。特に、人生前半期に、女らしさが自己の生き方の中心であった人は、人生後半期には右のような男らしさを自己の内部に統合していくことが求められる。

(二) 自己の有限性の自覚をどう乗り越えるか

青年期以降、職業をはじめとして社会の中での活動がアイデンティティの中核であった人は、中年期の入り口で、

自分の体力、活力、能力など、自分が人生の中でどれだけの仕事を達成できるかという限界に気づく人々が多い。中期に体験されるこのような自分の仕事の限界感の認識は、これまで多くの男性が信じてきた業績至上主義、あるいは、「強くたくましく、首尾よく達成できること」が人間としてすぐれているのだという価値観に鋭い見直しを迫るものである。例えば、筆者の中期期のアイデンティティに関する研究の中で出会った人々の中に、次のような事例がある。この二つの事例は、偶然にも二人とも大学の研究者であったが、優れた研究上の業績をあげるといふ自分の生き方と価値観に関して、中期に大きな危機に遭遇した人々である。

【事例一】 Aさん（四七歳、男性、大学教授）

Aさんは、ある地方都市郊外の農村で生まれ、高校卒業までそこで育った。大学卒業後は、大学院に進学して研究を続けたかったが、家の経済的な事情で断念し、大学卒業と同時に郷里へ帰り、高校教員をするかたわら、家業である農業に従事した。しかし、変化のない生活に対する充足感のなさや、もつと勉強したいという気持ちをおさえることができず、高校を退職して大学院に進学した。その時、すでに家庭があったため、大学院時代は別居生活が多く苦勞したという。大学院修了後、助手を経て、四一歳のとき、現在の大学に助教授として赴任した。この頃から家族と同

居できるようになり、ようやく家庭的にも落ち着いてきた。しかしながら、安定したポストに恵まれ、これからのいよ研究に打ち込み業績をあげていこうという気持ちよりも、時を逃してしまった、周囲のペースに乗れなかったというとり返しつかない思いがこの人の中には強い。Aさんは、時間的展望のせばまり、これから業績をあげられる余地の乏しさなど、中期のさまざまな否定的変化を強く体験しており、不安定感はその中期になってさらに増大している。

【事例二】 Bさん（四七歳、女性、大学助教授）

Bさんは、大学院を修了後、ある大学の助手に就職が決まり、二八歳の時、同じ研究職の男性と結婚した。すぐに子供ができたが、夫の母親が同居を申し出てくれたため、二人の子供の出生・育児は、何とか職業と両立させて乗り切ることができた。Bさんが三六歳の時、姑が入院する事態がおこり、職場と家庭、病院を行き来する生活が続いた。そしてBさんが四五歳の時、姑は癌で数カ月の療養の後、亡くなった。姑を看取った時、二人の子ども達は高校生になつており、Bさんの仕事は、これから順調の進みはずであった。Bさんは、出産・育児、姑の看病に追われている間は、研究に打ち込むのは、子どもがもう少し成長してからにしようとな得していたはずであった。しかしその間に、若手の男性研究者がどんどん力をつけ、業績をあげてきて

いることに、Bさんは、四〇代半ばに気づき、大きな焦燥感を体験することとなった。それに加えて、がんばりがきかない、夜更かしができないなど、心身の老化や更年期の症状も身にしみて体験され、Bさんは自分の研究の方向づけばかりか、仕事に打ち込む気力も減少しつつある。

【事例一】のAさん、【事例二】のBさんは、研究者という個としての有能性を鋭く問われる職業についているため、中年期に体験されたアイデンティティ危機は、深刻なものであった。しかしながら、成人期の心の発達は、個としての領域のみで達成されるものではない。仕事の上で業績をあげることから、後進の育成、つまり後進が一人前になっていくための援助やケアという関係性の領域へ、仕事の重点をシフトすることによっても、心の発達は遂げられ、ひいては、自らのアイデンティティも発達・成熟していくであろう。特に、大学に所属する研究者は、学生の教育も重要な職務である。「教師としての自分」という自覚によって、Aさん、Bさんのアイデンティティ危機は解決しているのではないであろうか。そしてこのことはまた、人生前半期の個としての自立、達成、有能性の獲得という、いわゆる男性的な仕事へのかかわりのみでなく、他者をはぐくみ育てるといふ女性的な特質をも自らの中に育て、統合していくことを意味している。

中年期のアイデンティティ危機は、このような人生前半期のスタンスに根本的な変容をもたらすものである。

三、現役引退後の生き方とジェンダー

次に、現役引退期および退職後の生き方とジェンダーの問題について考えてみよう。中年期から老年期への移行期である現役引退期のアイデンティティ危機や退職後の生活には、このジェンダーのあり方がより明確に現れる。

(一) 現役引退後の適応とジェンダー

どのようなジェンダー観をもっているかは、定年退職後の生活の心理的な豊かさに大きく影響する。筆者は以前、定年退職前後の男性を対象に、定年退職の受けとめ方を調査したことがある（岡本・山本、一九八五）。定年退職の認知のし方には、さまざまなタイプが見られたが、定年退職によるアイデンティティ危機が最も深いのは、「危機型二」とよばれるタイプであった。このタイプの人は、職業から引退した仕事なしの生活・人生は、ほとんどイメージすることができず、「仕事を辞めたら人生は終わり」、「定年退職は人生の墓場」という意識をもっている人々である。それに対して、「積極的歓迎型」の人々は、定年退職は自分の人生にとって重要な節目であるという意識は有していたが、退職後の人生は、仕事に代わる個人的な楽しみや社会的な活動が計画されており、仕事以外の人々とのつながり

も大切にされていた。このように、現役時代の仕事中心の生き方から、家族や友人との交わり、地域や家庭の世話をも含めた生活に転換できる人は、退職後の生活にもよく適応し、生を享受することができるとであろう。

ここで重要なことは、現役引退というライフステージの変化に対応して、性役割を含めて、自分の生活の上での役割をいかに柔軟に変化・転換できるかである。例えば、米国における退職後の生活適応とジェンダー・アイデンティティに関する研究においても、両性具有的性役割観をもつ男性は、退職後の生活適応がよいのに対して、伝統的な男性的性役割観をもつ男性は、退職のストレスが強いという知見も得られている（例えば、グラントマン、一九九〇）。

少子高齢社会を迎えた我が国においても、老年期の生活の質、つまり生活の自立や精神的充足感、ジェンダーの問題と深い関連性を有している。退職後の男性に対する「産業廃棄物」、「粗大ゴミ」、「濡れ落ち葉」等の揶揄は、現役引退というライフステージの変化に対応して、生活の上での役割や性役割観を臨機応変に転換できるだけの柔軟性をもたない男性に向けられたものである。

我が国における男性の家事・育児・介護の分担率は、妻が有職か否かにかかわらず、どのライフステージを見ても、諸外国に比べて著しく低い。このような他者をケアする力は、生活的自立の力を示すのみでなく、家族との別居や死

別、病気や障害などの危機を乗り越える力につながっている。また、高齢になり、体が不自由になった場合でも可能なきがり、生活身辺のことを自分ですること、自分でやるように支援することが、その人や子どもの喜びや生きる力になるのである（渡邊、一九九五）。特に、老年期には男性性、女性性を兼ね備えた性役割観とその実践力をもつことが大切であろう。

（二）老年期の夫婦関係とジェンダー

ジェンダーに対する考え方や態度は、老年期の夫婦の親密性にも大きな影響を及ぼす。老年期は心身の老化や生活パターンの変化によって、夫婦の親密性にも新しい適応が求められる時期である。そこには、右に述べたような性役割の見直しや転換のみでなく、どのようにその見直しと転換を行うかという課題も含まれている。しかしながら、これは実際のところ、なかなかむつかしい心の作業である。

例えば、定年退職後、夫が毎日家にいることが気に障るという女性は意外にたくさんいる。伝統的性役割観をもつ夫婦においては、夫が現役時代には、妻は家庭内のきりもりについて自分なりのやり方とペースを作りあげてきた。

ところが定年を迎えた夫が暇に任せて、家事を手伝う（口や手を出す？）ようになると、今まで築いて来た自分の領分を侵されたような気になるのである。また、定年までは家庭内のことは一切、妻に任せきりで、会社人間を地で行

くような仕事ぶりだった夫が、退職後は妻へのねぎらいを込めて、家事一切をひきうけるようになった。夫はこれで長年の妻の苦勞に報いることができると考えていたが、妻はまもなくひどい抑うつ状態に陥ってしまったという事例もある。これは、定年退職という大きな節目において、夫婦関係のバランスや心理力動を調整することがいかにむづかしいかを示すものである。このような事例は、夫婦の間で単に性役割の移行が行われればよいといった単純な問題ではないことを教えてくれる。

また、もう少し年をとり、夫婦のどちらかが体が不自由になった場合を考えてみよう。多くの家庭では配偶者が、体が不自由になった相手の身の回りの世話をすることになる。年をとってきた妻にしてみれば、夫の世話は肉体的にも大変な重労働であるが、世話される夫は、長年暮らしてきた習慣からあたりまえと思つて、妻に感謝やねぎらいの言葉もかけないという話も聞いたことがある。

これらはすべて、老年期に再び夫婦関係の見直しが必要であることを物語っている。そしておそらく老年期には老年期の、新しい親密な夫婦関係の再構築が求められるのである。

いずれにしても、中高年期の節目には、これまでの自分の生き方、自分にとって重要な他者とかかわりのあり方を見直し、人生後半期へむけてより自分らしい生き方を模

索し実践していくことが求められる。その「自分らしい生き方」とは、これまでの自分の生き方を見直し、これまで生きられなかった自分、影の自分も、統合した生き方である。それが心の発達であり、アイデンティティのさらなる深化・成熟である。ジェンダーに関する問題もその例外ではない。つまり、それまでの男性として、あるいは女性としての生き方を見直し、それらを「自分らしさ」の中に組み込んで生きる生き方を獲得することであろうと考える。

【引用文献】

- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. New York: W.W.Norton.
- 仁科弥生 (訳) 幼児期と社会 1, 2, みすず書房, 一九七七年
九八〇
- Gradman, T.J. 1990 *Does work make the man: Masculine identity and work during the transition to retirement*. Dissertation Abstracts International, 51(1) - B, 464.
- Levinson, D.J. 1978 *Seasons of a Man's Life*. New York: Alfred A. Knopf.
- 南博 (訳) 『人生の四季』 講談社, 一九八〇
- 岡本祐子 『中年からのアイデンティティ発達の心理学』 ナカニシヤ出版, 一九九七年
- 岡本祐子・山本多喜司 『定年退職期の自我同一性に関する研究』 教育心理学研究, 33, 一八五—一九三, 一九八五年
- 渡邊恵子 『自立再考—女性の自立・男性の自立—』 柏木恵子・高橋恵子 (編) 『発達心理学とフェミニズム』 ミネルヴァ書房, 七七一—一〇一より引用, 一九九五年